

一心寺かわら版

第三十九号 平成二十九年一月発行

ホームページ・ブログ・フェイスブックは「持名山一心寺」で検索

謹んで新年のご挨拶を申し上げます

旧年中は当山の護持運営にご協力いただき誠に有難うございました

本年もよろしくお願い申し上げます

南無阿弥陀仏



平成二十九年元旦 酉

「わかるはずの無いほどの御恩をいただいている
わかるのはそれだけ」

本年の柱掛け法語です。

みなさんは飛行機がなぜ飛ぶことができるかわかっていますか。「飛行機が飛べるのは、翼が揚力を持っているからです。そして翼が揚力を持つのは、翼回りに空気の循環があるからです。循環ができるためには、翼周りの流れがクッタの条件を満たすことが必要になります。流れがクッタの条件を満たすと、適切な迎え角を与えることで翼の回りに循環が発生します。循環によって、翼の上の方が流速が速くなり、これが翼の上下に圧力差を生む。翼の上の方が圧力が低いので、上に引き上げられる力が発生する。ベルヌーイの定理です。これが揚力です」(航空力学・松田卓也氏)

説明を聞いても正直よくわかりません。私にわかるのは飛行機が空を飛んでいるという事実だけ。飛ぶ原理はわからないけれども、安心して飛行機に乗っているのです。私たちの「わかる」というのはその程度なのです。

植木等さんの歌った「スーダラ節」。

「わかっちゃいるけどやめられねえ

ア ホレ スイスイ スーダララッタ
スラスラ スイスイスイ」と歌うコメデ
イソング。真面目な植木さんは当初、歌
うのをためらったといいます。その彼
に、浄土真宗の僧侶である父親がこうお
っしゃられたそうです。「この歌詞は我

が浄土真宗の宗祖、親鸞聖人の教えそのものだ。親鸞さまは九十歳まで生きられて、あれをやっちゃいけない、これをやっちゃいけない、そういうことを最後までみんなやっちゃった。人類が生きていく限り、このわかっちゃいるけどやめられないという生活はなくなるらない。これこそ親鸞聖人の教えなのだ。そういうものを人類の真理というんだ。上出来だ。がんばってこい」と。

煩惱に振り回されて苦しんでいることが、わかっているにもかかわらず、だから苦しみが無くなることはない。しかし、この「わかっちゃいるけど」が大事なのです。私たちも、わかっているのだけれども、ということがあるのではないのでしょうか。「わかる」には頭でと、全身でという二通りがあると思います。私たちは、頭でわかっているとしてもその通りに生きていく、全身で体験することはなかなかできません。全身でわかるといのが、いわばお釈迦さまの覚りでしよう。浄土真宗は「わかっちゃいるけどやめられない」私を包み込む阿弥陀仏のはたらきに目覚める教えです。

「恩」は「人をいたむ」、ひいて「めぐむ」意を表します。恩という字は、因と心からなります。因は原因(ものごとのおこり・もと)という言葉に使われています。もとを訪ねることで見えてくる

こころ、めぐみが「恩」でしょう。

日本人は恩返しを大切にします。物をいただいたら、同じくらい
の値段、価値のものをお返ししようと思います。しかし、形のないも
の、大切なものに値段はつけられません。そういうものをいただい
たら、何をお返しすればよいのでしょうか。

「恩を返すというけれど、返し切れないからご恩というのでし
よう」と教えられました。真宗門徒は、親鸞聖人のご法事である報
恩講を勤めます。聖人から、お念仏によって浄土へ生まれるという
素晴らしい生き方を教えられ、返し切れないご恩をいただいたと
いう思いが、報恩講を七百五十年以上続けてきた因なのでしょう。
先人は、お念仏のみ教えを喜び、人々に伝えていくことが恩返しで
あると考えたのです。

また、わかれば少しなりともお返しすることができるとしよ
うが、ご恩はわからないことが多いものです。両親、先祖はもちろ
ん、出遇ってきた方、食べてきたもの、見てきたもの、すべてが私
を作り上げているご恩なのです。

浄土真宗のご本尊は阿弥陀仏です。「阿」は否定、「弥陀」は量る
という意味があります。ですから「はかりしれない」仏さま。「南
無阿弥陀仏」によって、はかりしれないご恩をいただいております、そ
のはたらきによって浄土へ生まれゆくことをわからせていただく
のです。私たちには、お浄土というものはつきりとわかることは
できないかもしれません。しかし先人は、親鸞聖人がお念仏を喜び、
浄土に往生されたという事実を聞き信じ、「南無阿弥陀仏」の人生
を歩まれました。私たちもお念仏の中に、返し切れない、わかるは
ずの無いほどのご恩をいただいていることに気付いて、感謝の気
持ちをもって日々過ごしていきたいものです。

よるしるべ報告

二〇一三年に続いて瀬戸内国際芸
術祭公式プログラムとなった「よる
しるべ」。大勢の方に一心寺にお出で
いただくご縁となりました。

一心寺での作品を紹介。

★映像：梶高誠輔氏・本堂への参道
に有明浜の波模様。山門の外から、本
堂の縁からなど少し離れたところか
ら見ると立体的に浮かび上がり、ま
るで本当に海に來たかのよう。海の上
を歩き、波が來るたびに飛び越えよう
とする子供たちの姿も微笑ましいも
のがありました。

★陶の灯り：榎黄州氏・昼間見るとた
だの白い磁器。しかし、夜になると妖
しい光を放ちます。波模様とのコラボ
でより一層幻想的な景色に。

★香り：梶高果代氏・観音寺をイメー
ジし作り上げた香りのスプレーを香
り札に吹きかけて楽しみます。香りに
誘われて映像がより一層美しく見え
てくるから不思議です。

★パフォーマンス：トムスマ・オルタ
ナティブ氏・この二年「てのり湯」を
披露してくれましたが、今年「遊懐
石くくう諧の回跡」。観音寺の街、



名物から生み出した料理の数々。また、地藏菩薩や閻魔大王が登場する物語が笑いを巻き起こしながら展開。最後はてのり湯にも登場した「てのりごちさん」とともに静寂な時間。トムスマ氏の不思議な魅力あふれるパフォーマンス懐石でした。

★音・永田壮一郎氏・本堂内の仏具の音と念仏の声によって作り上げた音楽。三年間同じ音を使用しながら毎年全く異なったサウンド。また、観音寺サウンドシステムのライブでは、生でお念仏を称えさせていただきました。

よるしらべ報告

三年目となった「よるしらべ」。和蝋燭の灯りのみで堂内を照らした荘厳な雰囲気の中、長い伝統に培われた美しい声明と雅楽の音色が響き渡りました。

十月二十二日「声明と雅楽のしらべ」五会念仏作法・舞楽」は総勢三十四名の僧侶が集結。二百名を超える参拝者が一心に耳を傾けました。五会(ごえ)念仏作法は、中国の法照禪師(ほつしようぜんじ)が定め、慈覚大師円仁(じかくだいしえんにん)が日本に伝え比叡山で勤められていたもの。その中心である「極楽莊嚴讚」は高音でテンポの良い、お経のイメージとはかけ離れたもの。心地よい音楽と思われたのではないでしょう。今年の舞楽は「抜頭」



(ぼとう)。髪を振り乱して舞う勇壮な姿に、嫉妬に狂った妃、猛獣に親を殺されて怒り狂う息子、どちらが本当の由来とお感じになったでしょうか。

多くの方から「毎年楽しみにしています」との声。三回目の開催ですが、すでに秋の風物詩となっています。

十一月三〜四日は「オール・デイ声明」六時礼讃」。唐の善導大師(ぜんどうだいし)が著した『六時礼讃』(ろくじらいさん)に基づく伝統のお勤め。後鳥羽上皇の怒りを買って法然上人、親鸞聖人が流罪となる原因になったことで有名。一日を四時間ごと六回に分けて、昼夜を問わずただ仏を礼讃する。当時もこのような雰囲気だったのかと感動しつつ勤めさせていただきました。

このような機会が、多くの方々の仏縁となれば幸いです。

真宗教団連合間法大会報告

十月十七日、高松テルサにて約四百名参集のもと開催。まずは釈徹宗師の講演「落語の中の浄土真宗」。

真宗はお説教、お聴聞を大切にしました。厳しい戒律を守るわけではなく、日常の生活の中でみ教えを聞き暮らしていく。だから、落語などの庶民芸能の題材になった。お説教を聞いた昔のお年寄りの声、「死ぬのは怖くない。お説教を聞かせてもろうたから。阿弥陀様に迎えられるお浄土へお参りする」。彼らは特別な修行をしたわ





けでも難しい教学を学んだわけでもなく、ただお説教を聞いただけ。それで迷いを離れる。それが浄土真宗の面白いところであり、偽物ではないと感じる。

安楽庵策伝(あんらくあんさくでん)という僧侶がお説教の比喻の話を集めて『醒睡笑』(せいすいししょう)を著した。お説教は退屈で眠くなる、だから「睡眠を醒ます笑い」。これが落語の

テキストになった。一人の人間が扮装も背景もなしに正座して語り続けるという世界でも例のない話芸のスタイル。それは、仏教のお説教がルーツとなって出来上がった。古代社会では宗教儀式の真似をすることによって芸能が生まれた。法事は經典の読誦と説法からなる。読誦から歌いものの芸能が発達し、説法が語り芸能の土壌となった。語りに敏感に反応する、身を預けることがお聴聞においても落語においても大切です。



続いて桂坊枝師匠の落語。ここはうどん県、うどんをすすする真似がへたくそと言われないか心配ですが、と笑いを取りつつ「時うどん」へ。うどん代の支払い中に店主に時刻を聞くことよって勘定をごまかそうとするお話。「手水回し」は「ちようず」が何かわからないところから始まる。和尚さんに尋ねると「長頭」を回せというが間違

い。本当は洗面道具だったというお話。

最後は二人の対談。「手水回し」に出てくるような、ええ加減な

お坊さんを笑う落語が多い。賢ぶる姿を笑う。親鸞聖人は「外に賢善精進(けんぜんしょうじん)の相を現ずることを得され、内に虚仮(こけ)を懐ければなり」。外に立派そうに見せてはいけません、なぜなら中身は偽物なのだから、とおっしゃった。落語には欲望丸出しの人間が出てくる。内に虚仮を抱いているからこそ、お念仏の道歩んで行こうと感じていただければと思います、と閉められました。釈先生の音源やスライドを使った分かり易いお話と、坊枝師匠の軽妙な落語で会場は大いに盛り上がりました。

秋季永代経報告

秋季永代経、法話は初めてのご縁、千葉憲文師(まんのう町・善性寺)。

私たちは邪見、自己中心の心で生きている。それによって争いが起こり、愚痴が出てくることを自らの体験で説明。浄土真宗は「南無阿弥陀仏」の教え。「南無」とはお釈迦さまの国のことば、漢訳が『正信偈』にある「帰命」。



帰依する、おまかせするという意味。「阿弥陀」とは「無量」、はかることなし。私たちは自分中心で、量ってばかりの生き方をしている。その最たるものが先日起きたやまゆり園の事件では。いのちを量って、この人たちは生きる意味がないと殺人にまで及んだ。お念仏を通して、量ることなしという生き方に目覚めてゆかなければならない。そうして私も量ることができないいのちと気付かされ、そこにこそ喜びのある、空しくない人生を送ることができないのではないか。量ることなく生きていくことはできないが、そういう自分を自覚して、少なくとも「いのち」を量ることないようにしていきたいものです。と聞かせていただきました。